

地誌教材としてのオーストラリア

帝塚山学院泉ヶ丘高等学校 紀 禎 哉

1. はじめに

文部省が学習指導要領を大きく改訂した結果、地理Bの学習においてはいくつかの変更点が見られるようになった。とくに地誌分野では、従来の博物学的な要素を持った地誌学から、地域の規模に応じて地域性を多面的・多角的に考察するようになった。そのために、学習地域の選択の根拠と学習地域に課されたテーマは、とりわけ重要な課題となると思われる。そこで、『新詳地理B』（帝国書院）を教科書としたオーストラリア地誌を若干考えてみることにする。

2. 予備知識を導入する

オーストラリアを地誌学習のどの分野で扱うかは、一様ではない。いくつかの教科書を見ると、国家規模の地誌として扱っているものもあれば、州・大陸規模の地誌として扱っているものもある。内容も、文化的側面を中心に産業や国家間の結合に重点をおいているものもあれば、自然景観や気候などの自然地理分野に主眼をおいたものもある。ある意味で、この地域をどのようなテーマをもって扱うかによって、オーストラリアに対する認識の方向性や理解度が大きく異なってくるといえよう。

『新詳地理B』の教科書では、オーストラリアについて、多文化主義、入植の過程と農業・鉱産資源の開発、アジアとのつながりの3つのテーマで論じられている。しかし、オーストラリアに対する生徒の関心を質問してみると、有袋類を中心とした動物や、サンゴ礁地形・乾燥した大地やオ

ゾン層の破壊など、かなり広範な分野への興味もみられる。そこで、積極的に生徒たちの興味づけをはかり、自然環境や都市の位置関係の理解を深めるため、下記のような質問と作業をおこなってはどうか。

質問 1 オーストラリアと聞いて、最初に思いつくことは何ですか。

質問 2 近年、日本からオーストラリアへの観光客が飛躍的にのびている理由はなぜだろうか。

質問 3 最近、新聞で掲載された、オーストラリアに関する記事を何か知っていますか。

作業 1 白地図を利用し、南回帰線と東経140度を記入してみよう。

作業 2 現在自分が知っている都市や河川・山脈名などを記入してみよう。

作業 3 政府もしくは州観光局や日本の旅行会社が発行する旅行パンフレットなどを使い、観光地として訪問する都市や地域を作業2とは異なった色を用いて記入してみよう。その際、観光の目的のスポットなども記入しよう。（エアーズロックやグレートバリアリーフなど自然的な観光地だけではなく、文化的な観光地なども記入させてみる。）

上記のような質問と作業を行うことにより、オーストラリアの地形的特徴（それらは安定陸塊・古期造山帯・海岸のサンゴ礁地形など）や気候、オーストラリアが直面している環境問題などをすることは、文化・経済などを理解するうえで重要な役割をはたすものと考えられる。

3. 白豪主義から多文化主義への変化

現在、オーストラリアでは多くの民族が居住し、数多くの文化がうまく共存している。しかし、1970年代以降、多文化主義政策が政府によって積極的に推進されるまでには、数多くの紆余曲折があったことを見逃すわけにはゆかない。

とくに、

1. この地の先住民族がアボリジニーであり、彼らが長年にわたって不利益を被ってきたこと。
 2. イギリス人による初期の入植は流刑植民地であり、入植地点が沿岸部に散在していること。
 3. 入植の過程での労働不足を補うために、多くのヨーロッパ系移民がみられ、とくに1850年代以降アジアからの移民が急増した結果、連邦設立から1970年代初めまで白豪主義が採用されていたこと。
 4. イギリスのEC加盟によって、1970年代以降はアジアとの経済関係が深まり、その結果、インドシナ難民を積極的に受け入れたこと。
- この点については詳しく説明する必要がある。

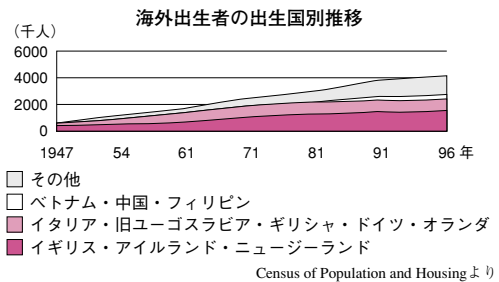
そのためには、写真や地図や統計を採用することにより、積極的に理解を深めたい。



ポートアースーの刑務所遺構

地図は、教科書に掲載されているものや文献などから利用し、統計に関しては、インターネットを活用すると、直接州政府の統計機関から得ることも可能である。これらによって、より具体的な

オーストラリア像を生徒たちに描かせてはどうだろうか。



4. 環太平洋地域との関わり

近年のオーストラリアを考えるさい、アジア、とくに日本との関係は重要な鍵となる。そこで、1970年代以前の日豪関係についても提示してはどうだろうか。とくに、1800年代の後半にみられた真珠貝採取に伴うトレス海峡周辺への移民や、サトウキビ栽培を目的としたクインズランド州への移民があったことは、ハワイやブラジルへの日本人移民と対比させてみるもおもしろい。

1970年代以降の日本や環太平洋地域との関係強化については、日本やアジアNIES諸国の国内生産の伸びに比例するように、関係が深まっていったことを強調したい（ラッキーカントリーへの変化）。その結果、APEC設立の必要性や、東アジア市場の重要性なども論じてみるのでないか。

以上のように、オーストラリアは地誌対象地として様々なテーマを持った地域である。それゆえに、多くの角度からこの地域の理解を試みることは可能である。しかし、いずれにしても、歴史地理学的な観点を用いることはおもしろい試みではないだろうか。

【参考文献】 野史歴史地理学研究会編（2000）『世界の風土と人びと』、ナカニシヤ出版